

「信仰は実験である」 —マリアの信仰の真実—

佐藤 博

奨励者紹介[さとう・ひろし]

日本キリスト教団京都丸太町教会名誉牧師

六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

(ルカによる福音書 1章26—38節)

神のお言葉への驚くべきマリアの信仰告白

マタイ・ルカによる福音書には、「天使ガブリエルのお告げ」に始まり「イエス様の誕生」・「馬小屋でお生まれになるイエス様」・「3人の占星術師の来訪」・「天使に招かれその出来事を目撃する羊飼いたち」など、イエス様誕生の物語が豊かに描かれています。

もう一方で、ルカはここでマリアの信仰の真実を記しています。天使は神様のお言葉として「あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産む」(ルカによる福音書1章30—31節)とマリアに告げます。その当時を生きだ婚約者のいる女性(乙女マリア)にとって「身ごもる」・「男の子を産む」とのお告げは、彼女の名譽を貶め人々の非難に晒され、その人生を破綻に至らしめる神様よりの求め・指図でした。この神様の求めに対し、マリアは「戸惑い」・「考え込」(ルカによる福音書1章29節)みましたが、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカによる福音書1章38節)とすべてを受け入れました。この「はしためです」という言葉に、マリアの覚悟と信仰の真実が示されています。この「はしため」にはさまざまな訳がありますが、原文は「奴隷」の女性形が用いられているため「女奴隷」が正しい訳と言えます。あえてこの言葉を用いたルカは、マリアの覚悟を表そうとしました。自らの名も生活も命もすべて主に委ね、主のお言葉が「この身に成りますように」と告白しています。驚くべき

神様のお言葉への信頼、神様のお言葉の受け入れの実例であり、驚くべきマリアの信仰の始まりです。

神様はこの途方もないマリアの信仰を支える者として、ダビデの末裔ヨセフをナザレの村に備えられました。福音書はそのことをマタイによる福音書で、マリアを支えるヨセフと記録しています。天使が夢に現れて「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻（正式には「許婚」）マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」（マタイによる福音書1章20節（ ）は筆者）と。神様はヨセフに乙女マリアの妊娠の現実を擁護し、マリアの支えに成れと命じています。

「信仰は実験である」との言葉との出会い

内村鑑三は1906(明治39)年10月、『聖書之研究』80号の「神学耶農学耶」の論文(内村鑑三『内村鑑三全集』14 岩波書店 293~294頁)で「余の基督教の信仰は(中略)事実の信仰である、理屈の信仰ではない、実験の信仰である、何故に神は在る乎、余は知らない、余は只神の在るのを知る、何故にキリストは余の救主である乎、余は能く知らない、余は唯キリストに由りて余の罪が取去られ、余は神を見るを得て潔きと義しきとに就て意ひ得るを知る、余は何故に聖書は神の言葉である乎を能く知らない、唯、其、余の心を動かすこと人の言葉の如くにあらざるを知る(中略)天然を識るの法は直に天然に接するにある、其如くキリストを識るの法は直に我等の霊に於て活きたるキリストに接するにある、二者を識るの方法は同一である、科学の方法は亦宗教の方法である、信仰は実験である、科学と宗教との異なる点は其方法精神に於て在らずして、単に其探求の領域に於て在る(中略)余に取りては宗教は余の科学を霊の界に移したまふである」と語っています。

突然の内村鑑三ですが、私の高校生時代の聖書研究会の参考書は、内村鑑三と弟子の黒崎幸吉らしいものでした。聖書のお言葉に生きようとした彼の言葉は、当時の私やキリスト信者にとって大きな影響力をもっていました。

1891(明治24)年の彼の教育勅語礼拝拒否事件(敬礼だけで最敬礼をしなかったことを不敬とされる。聖書十戒の一戒「我の外何物をも神とすべからず」に従ったものと思われる)以降、彼は、中学教師の公職を追われ、日本中身を置く所もない迫害の日々を神様のお言葉に従い生きた先駆者でした。

神様のお言葉に生きるという実験

私が伝道師として最初に赴任した今治教会の牧師、榎本保郎先生の言葉に「お言葉への聴従」という言葉がありました。これは、人間の解釈ではなく神様のお言葉をそのまま聞き従う信仰を表しています。

後に出会ったシェイクスピア研究家・児童文学者C・S・ルイスの、BBC放送での信仰講話『基督教の精髓』(新教出版社)という本があります。彼自身が付けた原題は『Mere Christianity』で、この「mere」は今では「ただの、単なる」などの意味ですが、古い英語では「純粋な、薄めない、混ぜない」の意味となります。ルイスの信仰は、神学や人間の理解や都合や利益で混ぜたり薄めたりしない神様のお言葉をそのまま信じる信仰で、神様のお言葉に生きようとした人でした。

マリアは年若い素朴な乙女でしたが、「お言葉どおり、この身に成りますように」とすべてを受け入れ聞き従いました。マリアの「信仰は実験である」の成果は「神の子イエス様の誕生」、ひいては主よりの罪の贖い・復活の命の授与に至るものでした。信仰の実験は説明や感想だけで済ますのではなく、その幸い

や失敗の実証・証しに至り信仰が自分のものとなります。

多くのキリスト者にとって、マリアの信仰の原点に回帰することが、クリスマスというイエス様の誕生の物語・神様の約束の物語を祝い、キリストの恩寵に与る入口に立つこととなります。

2016年12月21日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録